

9 日間の思い出

吉田中学校

岡 京之介

コロラド・スプリングスでの9日間はとても充実したものでした。

コロラドに行くまで、自分の英語がきちんと伝わるだろうか、ホストファミリーと打ち解けられるだろうかと、心の中は不安でいっぱいでした。

10 時間のフライトも終わりに近づいてきたころ、そろそろアメリカに着くんだという実感がわいてきました。さすがアメリカと言うべきか、僕たちの着陸したデンバー空港は想像よりもはるかに大きく、圧倒されました。とても不安だった入国審査では、審査官の方が明るく簡単な英語で話してくださったので緊張がほぐれました。空港からコロラド・スプリングスに向かう途中、道路がとても広いこと、周りに建物が1つも見当たらないことに気づき、やっぱりアメリカは大きい国だなと感動しました。

コロラド・スプリングスに着くと、バスの窓からホストファミリーのタイナー君とクララちゃんが僕と一貴君の名前が書かれたプラカードを持っているところが見えました。今年はホストファミリーと生活する時間がこれまでよりも長いそうで、僕たちは5日間を共に過ごしました。ホストファミリーの名前はサリーさん(お母さん)、ジェフさん(お父さん)、タイナー君(長男10歳)、クララちゃん(長女7歳)、そして犬のリオンです。ホストファミリーとは、ぎこちない英語を通じてではありましたが、なんとかこちらの思いを伝えながらサッカーなどをして打ち解けていきました。ホストファミリーとの生活の中で最も日本との違いを感じたのは、靴を履いたまま家の中に入ることと、毎日はお風呂に入らない習慣でした。靴のまま家に入って行くものだとは知ってはいても、初めて家に入るときは躊躇してしまいました。また、富士吉田に住んでいるので感じたことですが、水を飲むのに蛇口からではなく、ウォーターサーバーを使っていることに驚きました。

ホストファミリーは僕らに様々な貴重な体験をさせてくれました。その中で、いくつも日本と異なると感じるがありました。

1つ目は、車に乗っていた時のことです。窓から見える景色が何か日本と雰囲気が違うなあと感じました。山が緑ではなく茶色だったからです。コロラド・スプリングスの山には木が無く、例えるならば、夏の富士山のようなようでした。また、土の色が富士吉田とは違い赤土でした。

2つ目は、アウトドアショップに行った時のことです。そのアウトドアショップはとても大きく、壁に動物のはく製が飾ってあったりして、まるで遊園地のような明るい雰囲気でした。その中に、銃のコーナーがあったのです。アメリカの人にとってみれば普通のことなのでしょうが、僕にとってはかなり衝撃的でした。映画やゲームの中でしか見ることはない人を殺すための道具が目の前にあり、恐ろしいと思いました。しかし、ホストファミリーは「自分たちは銃は好きではないし、持ってもいない。そういう人もたくさんいるんだよ」

と教えてくれました。僕は、日本で「アメリカでは子供用の銃が販売されている」などというニュースを見ていて、アメリカでは誰もが銃を持っているのが普通だと誤解していたので、ホストファミリーの話を聞いて、少し安心しました。

3つ目は、ダウンタウンへ買い物に連れていってもらった時のことです。道路は富士吉田と比べ、歩道も人が4人並んで歩けるくらい広く、安心して歩けました。また、どこか都会的な印象を受けました。それは街が区画されていたことと、あらゆるお店が見渡す限り整然と立ち並んでいたことで、どんなものでも買えそうに感じたからだと思います。日本での都会という、店がひしめき合っていて窮屈なイメージですが、そこはゆったりとしていました。また、アメリカというとファストフードのイメージがありましたが、ファストフード店よりも個性的なレストランや個人店の方が多かったように感じました。ホストファミリーに連れていってもらったハンバーガーレストランも、ファストフード店ではなく、本格的なレストランでとても美味しかったです。また、どのお店も内装にこだわっていて、お洒落だなあと感動しました。

4つ目は、ウォルマートというスーパーマーケットへ行った時のことです。売っているものはどれもパッケージが大きく、そして安いのでとても驚きました。日本とは買い物のスタイルが違うのだなと思いました。

逆に、富士吉田と同じだなと感じたところもありました。出会った人たちがみんな優しくしてくれるところや、山や湖など自然に溢れているところ、アウトドアライフが充実しているところ、涼しい気候であるところなどです。また、コロラドで公園に行くことになり、クララちゃんとタイナー君と向かっている時は、坂ばかりで富士吉田とよく似ているなあと感じました。アメリカでは自分の気持ちをはっきり言わないと伝わらないとよく聞きますが、サリーさんは出かけた時も、疲れているだろうからと僕らの体調を考えて休ませてくれました。

もう一つ、ホストファミリーの対応にとっても感動した出来事がありました。それはアーケードからサッカー場に向かっている時のことでした。僕たちの前を走っていた車が帽子を落としたことに気づいたホストファミリーは、車を止めてそれを拾いに行き、そしてその車が駐車するまで追いかけて、その帽子を手渡してあげたのです。本当に感動し、日本でここまでできる人はいるだろうか、と思いました。

ホストファミリーと別れる日、僕と一貴君は感謝の手紙を渡しました。すると、「メールでまた連絡しよう。いつでも遊びにおいで」といってくれました。それを聞いて、僕はこの繋がりをいつまでも続けていきたいと思いました。

このコロラド派遣で、僕は富士吉田とコロラド・スプリングスの文化や生活の違いを実感してきました。また、自分の英語がまだまだ未熟であることを痛感し、もっと英語力を伸ばしてたくさんの人と会話したいと思うようになりました。コロラドの人々は優しく温かい人たちばかりでした。コロラド派遣を成功させるためにこれまで協力していただいた富士吉田市の方々、コロラドでの生活を体験させていただいたの方々、そして両親への感謝を忘れ

ず、今回得られたかけがえのない経験をこれからの人生に活かしていきたいと思います。